

【研究ノート】

「華嚴五十五所絵」をめぐる

当館所蔵の仏教絵画に「善財童子絵巻断簡」(図1)があります。善財童子が文殊菩薩の指南を受け、善知識(聖者)を順に訪ねていく様子を描いたものです。「華嚴経」「入法界品」に説かれています。「華嚴五十五所絵巻」とも称されるように、五十五の場面に分けられます。当館所蔵の断簡は、五十三番目の善知識である弥勒菩薩と対面する場面が描かれています。ところが、画面上部の色紙形には「第五十二」と記されます。

実は、善財童子が実際に訪問した善知識は五十四人なのです。旅の終盤で、文殊菩薩と再び会うためです。また、五十一番目と五十二番目の善知識である徳生童子・有徳童女とは、同じ場所で同時に訪問するため、厳密には「五十三」あるいは「五十四」所となり、意外にも五十五所の由来はよく分かっていません。

善財童子及び善知識の絵画化は、唐より伝えられた図像を元に、奈良時代には既に行われたことが記録から伺えます。残念ながら当時の作例は伝わりませんが、その図像系譜に位置づけられる遺例として、「善財童子歴参図(華嚴五十五所絵)」が挙げられます。現状は額に改装され、一図に一場面が描かれています。東大寺や根津美術館などに分蔵されて二十面が現存します。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、東大寺における華嚴教学の拠点であった尊勝院では、香象大師法蔵の撰述になる「華嚴経探玄記」を一巻ずつ講義する、三十講と称される行事が毎年行われていました。その際に懸けられた画像がこの「歴参図」であり、その制作は十二世紀半ば頃であることが、先学

によって明らかにされています。

画絹の状態が芳しくなく、彩色の剥落もあり、図様が判然としない場面もありますが、本稿では、三十七番目の場面にあたる「守護一切城増長威力主夜神」(根津美術館蔵)に注目し(図2、以下根津本と略称)、一連の作品を描いた絵師について考えたいと思います。

根津本は、画面中央に蓮華座に坐す主夜神をひときわ大きく表し、周りには七体の邪鬼が描かれます。彩色は全体に薄く、顔料が載るというよりも、絹目が染まっているような印象を受けます。裏彩色は施されていません。肉身をかたどる輪郭線は、当たりのある肥瘦の強い墨線です。ただし、部分的に何度かなぞられた箇所が認められ、剥落箇所も多い画面状態を考慮すると、一連の絵画は度々修理されながら大切に守り伝えられてきたことを物語ります。顔貌表現に着目すると、何れの邪鬼も非常に愛らしい、豊かで生き生きとした表情を見せています(図3)。

主夜神に対面するのが合掌する善財童子です。肉身部を白に塗り、墨線にて描き起こしを行います。ふっくらとした顔貌は、眉や目を一筋の墨線のみで表す対照的な表現です。根津本を含む額装本歴参図の制作者については、尊勝院周辺が想定されますが、詳細は明らかではありません。

平安時代末期の東大寺周辺で制作された絵画には、権威ある過去の図像を再構成した作例が認められます。南都六宗の一つである俱舍宗に関わる祖師たちを描いた「俱舍曼荼羅図」(東大寺蔵)が代表的です。描き込まれた図像は、奈良時代の東大寺に関わるものが意

図的に選択されています。すなわち、法華堂根本曼荼羅、戒壇院に安置された厨子の扉絵、同じく大仏殿に安置された華嚴宗の厨子扉絵です。このうち厨子そのものは治承四年(1180)の兵火により焼失しますが、法華堂根本曼荼羅はアメリカ・ボストン美術館に所蔵されています。軸裏に添付された修理銘によると、「天竺之真本」とある同絵画を久安四年(1148)に珍海(1091~1152)が修復したことが分かります。珍海は、東大寺における三論教学の中心であった東南院の覚樹に学び、教学及び図像に精通するだけでなく、高い絵画技術も有していました。また「天竺之真本」と明記されたことは、同絵画が権威ある重要な仏画であると認識されていたことを示します。絵画上の合理的な構図や表現を犠牲にしても、特別な「図像」を用いることに意味があったといえます。

平安時代後半から鎌倉時代には、数多くの図像や儀軌を集めて整理した図像集が数多く編纂されました。仁和寺の恵什による「図像抄」や心覚の「別尊雜記」などが著名ですが、ここに取り上げる「先徳図像」(東京国立博物館蔵)もその一つです。インド・中国・日本、三国の高僧を描いた図像集で、奥書によると玄証(1146~1222?)が師である勧修寺仁済の所持本を書写したことが分かります。玄証は高野山月上院で修行し、数多くの図像や聖教を収集し筆写したことが知られます。高野山から勧修寺に移り、仁済から受法された年は文治二年(1186)であるため、それ以降に写されたことが分かります。

今ここでその表現を確認してみると、肥瘦のある墨線によって一人一人の人物が丁寧に描き出されます。各々個性豊かな表情を示し、頬や唇には朱がさされています(図4)。特に、杏仁形の大きな瞳は表情を作り出

す重要な要素であり、根津本に描かれた邪鬼を想起させます。

また、珍海が描いたとされる「仁王経護法諸尊図」(南方幅・教王護国寺蔵)においても類似する描写が見出され、流麗な線で描かれるこうした諧謔味ある表情は、図像集と共通する表現と言えるでしょう。

慎重に比較検討しなければなりません。額装本歴参図の制作には、珍海や玄証のような、図像の知識と高い画技を有した僧侶が携わった可能性が高いと思われます。東南院の覚樹と珍海による俱舍曼荼羅図の制作を鑑みると、学侶と図像家の協働による作画活動は、尊勝院においても同様に行われていたと思われる。額装本の制作者の謎を解く鍵は、この辺りに求められるのかもしれませんが。(古川播一)

※図4は、特別展『美麗一院政期の絵画』図録、奈良国立博物館、2007年、より転載させて頂きました。

図2 根津本(全図)



図4 先徳図像(部分)



図1 善財童子絵巻断簡(当館蔵)



図3 根津本(邪鬼)

